

2 眼 と は ？

ものごとを考えているとき経験するのは、ちょっとしたことがヒントになって、問題解決の糸口をつかむことである。これを「ひらめき」とか「第六感」と呼ぶこともあるが、私たちの頭のなかで起こる現象であることを考えれば、決して不可視のものではない。

アイデアを捻出するための創造技法がある。有名なものでは、ブレーン・ストーミング、K J法、NM法、等価変換思考法、シネクティクス、等々。かく言う私も一知半解の知識しか持ちあわせていないが、ここでは、シネクティクスのひとつの具体例をあげてみよう。

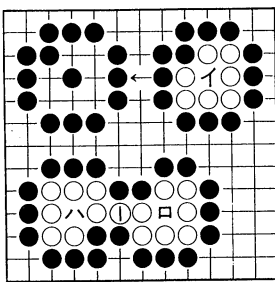
シネクティクスとは、その語源がギリシア語からきたもので、「2個以上のものを結合する」という意味あいである。事柄Aと事柄Bを類比させ、見慣れないものを見慣れたものにしたたり、見慣れたものを見慣れないものにするることによって、独自のアイデアを出していく技法である。

囲碁の棋理と人生の道理を組上にのせる。私の棋力がザル碁の極致であるのは周知の事実だが、へボはへボなりに見方をもっているもので、はずかしくもなくその一端を述べてみる。(棋理であれ道理であれ、その意味するものは深淵である。ここでは、その一面をうすすべりに見ていく。)

まず、その前に、囲碁のルールを知っていないと話にならないので、ここでの関連する部分をあげておこう。

「図-1の右上の形、白七子が黒に囲まれて、アタリになっています。次に黒はイと打てば、白をウチアゲて、左上のような地にすることができます。

図-1



下辺の形、白は1と打って左右がつながりました。黒は完全に封鎖していますが、口あるいはハと打つても白を取ることができません。アタリでないからです。(略)

つまり、この白は黒がどうしてもウチアゲ

ることのできない石一生きている石一です。(略) 二つの眼(め)が石を生きるための最低の条件です」(『週刊碁』昭和55年2月5日号から)

このルールを踏まえ、次の①～③が言えるだろう。

① 2 眼は、最低の「活き」である。2 眼がなければ、相手の

領域のなかでどんなに暴れまわっても、最後には「死」んでしまう。

② 2 眼あれば、相手にいくら攻められても、「死」ぬことはない。それを足がかりにして、強烈に相手を攻めることができる。

③ 2 眼がなければ、それを「活き」るためには、——(イ)「活き」るためのスジをとことん見つける。(ロ)その部分を捨てて、それを取らせることにより、他の部分で「活き」る。(ハ)玉砕を覚悟して、なりふりかまわずやって、うまくいけば「活き」、さもなければ「死」。等々。——やっつけていかに得ない。

囲碁を御存知ない方には、あるいはチンパンカンパンかも知れないが、それを度外視しても、上記①～③を読めば、囲碁が人生に似ているような印象をもたれることと思う。

さて、人生において2眼とはなにか。それは、人によって様々である。ある人にとっては職場であったり、又ある人にとっては親友であったり、あるいは特技であるかも知れない。ともあれ、これらが各人にとって日常の基盤(公的かつ私的に)となるものであることは疑いない。2眼とは、その人の「生活の支え」であり「生きがい」となるものである。

人生の2眼が確保されている者にとって、日常のなかで自己を跳躍させることはより可能である。そして、それが確保されていないと意識している者にとって、基盤にもとづいていないため、あるいは基盤に無自覚であるため、自己を跳躍させることは難しい。

ただ、ここで注意しなければならないことは、人生の2眼は、囲碁とちがって、個人の主観的な境地がはいりこむこと、あるいは絶対的なものではないということである。囲碁の2眼は、ルールとして絶対不可侵である。しかし。人生において、それはあながい不確実性をはらんでいる。いつ、落とし穴にはまるとも限らない。つねに自己の2眼を確かめながら、現状をみつめていくことが肝要だということだろう。

あなたによって、2眼とはなにか。それを、あなたはどのように自分のものになっているのか。私たちは、繰り返し自問しなければならない。(斉藤政己)

レディーズ & ジェントルメン

最近、スポーツ人口が大巾に増加しているといわれています。しかし、それも若い人達为中心であり、大方の人達は運動不足を気かけながらも、なかなかその機会を得られないのが現状です。折しも県庁裏のテニスコートでは各課対抗テニス大会のまっ盛り、“教えてあげるから6ヵ月辛抱してごらん”と勧める人がいて、優勝チームが決定する頃には、その気になってしまっていた。それもスポーツに無縁であった女性ばかりでした。5人のレディと1人のジェントルメン、クラブの名前の誕生です。現在会員20名、4課の職員で構成されていますが、どなたでも歓迎しますので、私達と楽しく汗を流してみませんか。以下、会員をご紹介します。

村田健二 クラブ代表。「楽しくやっていければと思っています。しかし、スポーツマンにとって忘れてならないのはルールに基づくプレーであると云うことです。」

磯部雅代 マネージャー。夏は登山、冬はスキーとスポーツウーマン。「トレパンひざ下までまくり上げるとなぜか力がでてくるの」和服姿はまた格別美しい。

中島洋子 会計。「汗かき姫です。寒中だというのに新しく買った水色のステキなトレーナーが汗でぐっしょりなの、でも体重減らないね。」減食している様子なし。

渡辺博義 監督。結婚を期にスタミナをつけるために始めたとか。「武子さんの名言“テニスはファッションから”に心うたれました。黒Pチメガネ、黒Tシャツ、黒パンツ、スネ毛も黒でまとめてみました。」

斉藤利夫 男子部長。「統計課にいる時テニスを覚え、今の奥さんと一緒になりました。大切な巡り会いを作ってくれたテニスに足を向けて寝た事はありません。」

稲毛信子 女子部長。バドミントンはプロ級。「今、バドミントンとテニスのラケットの重さの違いに悩んでいます」とはいえ、やはり一番上達しているとコーチ。

武子孝之 コーチ。専門は硬式テニス、スキー、ダンス、写真と多趣味。「陰険なテニスを心がけています。勝つためには手段を選ばず」テニスウェアはステキです。

中里典子 コーチ。かつて県庁テニス部の名花であった。「ナガナガウマグナンナイン、構えるのが遅いよ」1月26日テニス歴10年間で初めて優勝し、大きなトロフィーを胸に抱いた。勿論グンナ様とペアで!

酒井弘子 広報部。“テニス”の持つイメージと一番縁遠い感じ。でもラケットとシューズを新調したのは一番早か

った。“あの人がやるのなら”とみんなに自信を与えた。

吉成武久 相談役。クラブの創設者。「去年の9月26日テニスコートに女性ばかり5人を並べてラケットを振らせた。僕は恥かしくて野球帽を目深にかぶり銀杏の木の下に身を隠すようにしていたなー。でも良く僕の後についてきてくれたよ、うん、やっぱり良かったよ。テニス大好きさ。」

埴 友子 ジョッキング、縄飛びとスポーツを楽しんでいる。「最近、腰が低くスタンスも良くなり、埴さんの上達が目に見えるね」と中里コーチの言葉。

渡辺仁子 行動派で楽しい人。「なかなか思うようにいかないわね、でもあたしやめないわよ。」去年10月27日第1回大会にはだんな様も参加されペアを組んだが残念ながら最下位に終わった。

木口光男 「いやあ、どうも、まだ1回しか練習に出られないんですよ。仕事も忙がしいしそっちまで廻らないね。やればまだまだ若い者には負けないですよ。」

土屋和子 「あたし、農業試験場にいる時に覚えたの。なかなか練習に出られないけど、あたしのテニスどっちかという試合向きなの。じゃ、がんばってね。」

谷田部久夫 ボールに向う粘りは抜群。「僕もラケット買ったよ。自分のだと打ちやすいね。今度試合いつ?」試合ではいつも好成績を収めている。

細谷秀明 ベストドレッサー。マージャンに変わり、テニスでサタデーナイトフィーバー!「細身の体とず太い心(?)がボクのセールスポイントです。」

横須賀春史 「ボク、ミナト(那珂湊)のヨコスカです。経済的な理由でまだラケット持っていませんが、誰か安く買っていただけませんか。」

大門留美子 若くて美しくてやさしい大ちゃん。「クラブに入った理由は配偶者えらびが第一なんですけど、今はプレーの方で精いっぱいです。」

磯野克行 「まだ、あまりみんなとお付合はないのですが、お近付になりたくて入りました。ぶっきらぼうに見えるけど、話してみてください。味があります。」

斉藤政己 「内気な僕ですが、家に帰れば可愛い娘の父親です。テニスを覚え、美しく成長したスコート姿の娘とプレーするのが、目下の夢です。」 (酒井弘子)